

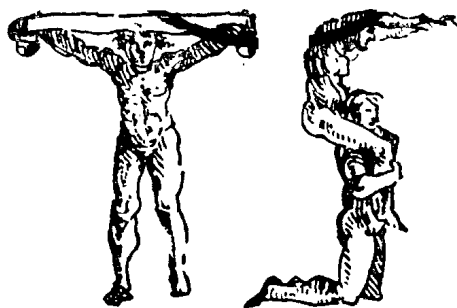


ビブリオテカ
澁澤龍彦

VI

ビブリオテカ
澁澤龍彦

VI



白水社

ビブリオテクア澁澤龍彦 VI (全6巻)
思考の紋章学 機械仕掛のエロス

定価二五〇〇円

一九八〇年三月五日印刷
一九八〇年三月一日発行

著者 © 澁澤龍彦

発行者 中森季雄

印刷者 青木勇

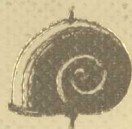
発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三(二九)七八一一
電話 編集部〇三(二九)七八二一

振替東京九一三三二二八
郵便番号一〇一

精興社印刷・黒岩製本

(分) 1390 (製) 76900 (出) 6911



ビブリオテカ
澁澤龍彦

VI

ビブリオテクア澁澤龍彦 VI (全6巻)
思考の紋章学 機械仕掛のエロス

定価二五〇〇円

一九八〇年三月五日印刷
一九八〇年三月一日発行

著者 © 澁澤龍彦
しづ さわ たつ ひと

発行者 中森季雄

印刷者 青木勇

発行所 株式会社白水社

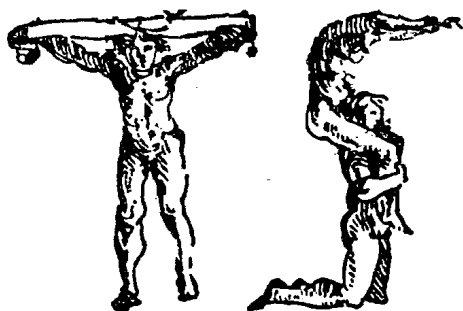
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三(二九)七八二一
編集部〇三(二九)七八二一
振替東京九一三三二二八
郵便番号一〇一

精興社印刷・黒岩製本

(分) 1390 (製) 76900 (出) 6911

ビブリオテカ
澁澤龍彦

V



白水社

目次

思考の紋章学

ランプの廻転	二
夢について	二七
幻鳥譚	四四
姉の力	五三
付喪神	八〇
時間のパラドックスについて	九六
オドラデク	一二三
ウィタ・セクスアリス	一三〇
悪魔の創造	一四七
黄金虫	一六四
円環の渴き	一七九

愛の植物学 一五五

あとがき 二二三

機械仕掛のエロス

I

絶対と超越のエロティシズム 二九

文学的ボルノグラフィー ビエール・ド・マンディアルグの匿名作品について 二四四
詩人における女のイメージ アンドレ・ブルトン 二五六

『黒いユーモア選集』について 二六三

黒いユーモア シュルレアリスムと文学 二七〇

ジャン・ジュネ論 二七三

ジャン・ジュネ断章 二九〇

II

もう一つの文学史 三〇一

犯罪文学者考 三〇五

フランス怪奇小説の系譜 三二九

黒魔術考 三三三

造形美術とエロティシズム 三八〇

悪魔のエロトロギア 西欧美術史の背景 三八六

苦痛と快楽 拷問について 四〇一

III

エロス、性を超えるもの 四二一

現代のエロス 四三三

現代日本文学における「性の追求」 四三三

あとがき 四七〇

あとがき 四七一

初出一覧 四七五

著作目録 四七九

翻訳書目録 四八五

装幀 著者

思考の紋章学

ランプの廻転

三島由紀夫が柳田國男の『遠野物語』の一節を引きながら、幽霊という非現実の存在を現実化させる力について論じている部分（『小説とは何か』所収）に、私は以前から、ちょっと異議を差挟んでおきたい氣持があった。じつは三島の生前にも、私はそのことを本人に向って口にしたのだが、話がうまく噛み合わず、不本意ながらそのままになってしまったおぼえがある。本人が幽明界を異にしてみた今となって、その本人の語った幽霊談を蒸し返すのも奇妙といえは奇妙なことであろうが、まあ、三島もせいぜい幽界で苦笑するぐらいで、わざわざ幽霊となってこの世に出てくるほどのことは万々あるまいと思う。

ともあれ、少し長いが柳田國男の文章を次に引用してみよう。

「佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に取納め親族の者集り来て其夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心の為離縁せられたる婦人も亦其中に在りき。喪の間は火の氣を絶やすことを忌むが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲爐裡の両側に坐り、母人は旁に炭籠を置き、折々炭を継ぎてありしに、ふと裏口の方より足音して来る者あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かゞみ

て衣物の裾の引ずるを、三角に取上げて前に縫附けてありしが、まぎ／＼とその通りにて、縞目にも目覚えあり。あなやと思ふ間も無く、二人の女の坐れる爐の脇を通り行くとて、裾にて炭取にさはりしに、丸き炭取なればくる／＼とまはりたり。(後略)

この文章のなかの「炭取がくるくると廻った」という箇所が、三島の大いに力説してやまないところであつて、彼によれば、これこそ日常的な現実を非日常的な超現実性に切り替える、いわば「現実の転位のための蝶番」のようなものだという。つまり、ただ幽霊がこの世に出現するだけでは、それは目の錯覚かもしれない、幻覚かもしれない、私たちの現実はまだ少しも侵犯されてはいないが、その幽霊が物理的な力をもって、私たちの現実世界の物理法則にしたがった秩序を狂わせるとなると、これはもう、幽霊をふくめた超現実が圧倒的に優位に立ったことの証左であつて、この畏怖すべき超現実を私たちは信じざるを得なくなるだろう、というわけである。炭取の廻転が幽霊の實在の紛う方なき証拠であつて、作者の筆は炭取を廻転させることによって、幽霊のリアリティーを一挙に確保することになった、というわけである。

しかし私にいわせれば、ここには明らかに三島の論理の短絡(この言葉は好きではなく、いままで使ったこともないが、ほかに適当な言葉がないから初めて使うことにする)があり、二つの現実の混同があるような気がする。二つの現実とは、一つは佐々木氏の曾祖母の死んだ日の遠野郷の現実と、もう一つは柳田の筆が描き出した物語の現実である。私たちは、いうまでもなく明治時代の遠野郷に住んでいるわけではなく、佐々木氏の曾祖母の通夜に列席したわけでもないから、実際に炭取がくるくると廻ったのを見てはいないし、また見る必要もないであらう。ただ柳田の文章の力、言語表現力によつ

て、それを内的に体験すれば足りるであろう。あえていえば、炭取が廻ったという物理的な事実、それをその場で見ていたひとには「現実の転位」でもあったであろうが、柳田の言語表現力には直接に何の関係もないし、また今日、柳田の文章を読む私たちにとっては、さらに何の関係もないのである。柳田の筆が廻転させたのは、現実の遠野郷の炭取ではなくて、あくまで私たちの想像裡の炭取にすぎないからだ。

ここまでいってしまうと、この私の論旨はあんまり当り前すぎて、いままでくどくどと述べてきたこと自体、何だか馬鹿馬鹿しいような気がしてくるほどである。しかし断わっておかねばならないのは、私がここで、もっぱら三島の論理のあらを探すために、わざわざ柳田國男の文章などを引っ張り出してきたのでは決してないということだ。たしかに三島の内心には、イスラエル軍のラッパのひびきによって、エリコの城壁の崩れるような奇蹟を待望する心情があったであろう。言葉の力によって、炭取の動くような超現実を信じたい気持があったであろう。しかし私がいいたいのは、必ずしもそのことではない。そんな神秘主義に関心があるわけではないのである。私は、たとえば炭取などといった、つまらない日常の器物に着目し、よしんば論理は短絡していようとも、その日常の器物の不思議な廻転にこそ、小説を小説たらしめる本質があると主張した三島の文学観に、ふかい共感をおぼえるのである。

実体がないはずの幽霊の着物の裾に炭取がさわって、炭取がくるくると廻ったというシーンは、柳田國男の力強い簡潔な筆によって、私たちの心に生き生きと喚起され、それがこの短い一篇の物語の眼目となっている。焦点となっている。たしかに私たちの想像裡においては、柳田の筆の力によって、炭取はくるくると廻ったといってもよいであろう。炭取の廻転は、ここにおいて、具体的にして象徴的な価

値をおび、あらゆる超現実の实在を認知するための指標となったのだ。——三島のいわんとしていたことは、要するに、以上のようなことであつたと思われる。

理窟を抜きにして簡単にいってしまえば、『遠野物語』にふくまれる百余篇の物語のなかから、くると廻る炭取などといった、子供っぽい奇妙なオブジェをえらび出し、これを象徴的な価値にまで高めなければ気がすまなかつたところに、私は、いかにも三島由紀夫らしい、小説家としての好ましい氣質を認めないわけにはいかないのである。この私の論理は、はたして短絡しているだろうか。

短絡であるうとなかうと、そんなことはどうでもよいのであつて、じつは私の頭のなかには、この『遠野物語』における炭取の廻転のシーンから、ただちに思い出さなければならないところの、記憶のなかのもう一つ別のシーンがあつたのである。もしかしたら、古来の幽霊譚あるいは妖怪譚のなかで、炭取のような日常の器物を廻転させるという手法は、かなり常套的な手法となつていゝものではあるまいか、とさえ私には思われた。次に引用するのは、泉鏡花の『草迷宮』のなかの一節である。

「其の立廻りですもの。灯が危いから傍へ退いて、私は其の毎に洋灯を圧へ圧へしたんですがね。坐つてゐる人が、真個に転覆るほど、根太から揺れるのでない証拠には、私が氣を着けて居ます洋灯は、躍りはためく其の畳の上でも、静として、些とも動きはせんのです。

然し又洋灯ばかりが、笠から始めて、ぐる／＼と廻つた事がありました。やがて貴僧、風車のやうに舞ふ、其の癖、場所は変らないので、あれ／＼と云ふ内に火が真丸になる、と見て居る内、白くなつて、其に蒼味がさして、茫として、熟と据ゑ、其の厭な光つたら。」

ちよつと説明しておくが、このシーンは、化けもの屋敷における連夜の化けものの活動のありさま